

小山田与清の子息をめぐつて

——与叔と清年と蔵書の関係——

梅 田 径

一 はじめに

本稿では、江戸時代後期に活躍した和学者、小山田与清（天明三年…一七八三）弘化四年…一八四七）の子息たちの活動と与清没後の蔵書管理について論じる。

与清には四男一女の子女子息がいた。長男の季興堅は妾腹で荒川氏の養子となり、ほとんど交流が確認できない。与清の嫡子としては与叔（鈴木源蔵、源蔵与叔俊平）、清年（幸次郎、為次郎）がいた。高田家の事業であった見沼通船の方は与叔の長男であった清常（高田貢平）が継承していったが、国学の面で期待をかけていた清年は一七歳で早逝、与叔は国学者として大成することはなかった⁽²⁾。なお、もう一人、丸満という三男がいたとする資料もある⁽³⁾。与清の旧蔵書中には、清年や与叔が手

を加えた旨の奥書が散見され、与清の集書や校合作業に子息が関与していたことが確認できる。与叔が与清没後の蔵書管理に関わっていたことは従来指摘されておらず、与清の子息たちの動向について、小山田与清旧蔵書のあり方とも関連して再考すべき余地がある。

本稿では清年と与叔の活動の実態を史料に即して把握しつつ、与清旧蔵書から蔵書管理のあり方、そして与清没後の蔵書管理について考えてみたい。

二 与清の後継者たち

与清の好學は実父であった田中本孝からの影響が少なからず認められるものの⁽⁴⁾、本格的な学問を始めるにあたっては二人の師の存在が大きかった。漢文を古屋昔陽に学び、村田春海から

和学の薰陶を受けた。特に村田春海からの影響は強く、しばしば自分の考証や随筆において「師説」たる村田春海説を参照している。『松屋叢話』巻第一には加藤千蔭と村田春海を並べて論評する記事があり、春海は賀茂真淵の門人としてだけでなく、和歌詩文を詠むわざにも優れていたと述べている⁵⁵。他の国学者同様、自身の学統に関心を持ち、与清は国学者たちの道統を『松屋筆記』、『擁書樓日記』などに記しているが、それらの系図でも村田春海の門弟として自らを位置づけている。与清も自ら門弟をとって「門弟録」という形で名簿を遺していた。増田由貴は、門弟たちが与清の学知形成に大きな影響を与えていたことを論証している。現存する二冊の門弟録からは、江戸や大坂のみならず、水戸、松浦にいたるまで、幅広い地域に門弟がいたことが確認できる。与清は「松屋門」とでも呼ぶべき門弟らの管理や教導に取り組んだ結果、猿渡盛章、猿渡容盛、間宮永好、伊能頼則、鶴峯戊申らが与清の門弟として名を残している⁵⁶。

与清が門弟とならんで学業において期待を寄せていたのは、与叔、清年の二人の子息であった。就中、清年は国学に強い関心を示し、与清もまた溺愛といつてよいほどの期待と愛情を寄せていたようである。しかし、清年はわずか十七才で急逝、その折の悲しみを自らの私家集に次のように書き留めている。

文政七年とせいふとしのうるふは月の廿日あまりなぬ
かの日の巳の時ばかり、日ころやよいの半に、ふした

る次郎子の為次郎清年が身まかれるをなげきて
まよはじと我かしこげにいひこしをこのわかれちの末いかにせん

おこたりついさめしことも中／＼になくてぞ人とかやま
る、かな

深川靈巖寺の錦谷に墓をつくりて、石のたくみ鍬よろにこゝをたて、うしろをきれなどいひをしへて

さだめなきものなりながらおもひきやこのおくつきをわれ
つかんとは⁵⁹

文政七年（一八二四）三月から閏八月にかけて病床にあつた清年が遂に亡くなつてしまつた歎きを詠んだ歌である。「おこたり」を「いさめ」た事を悔いているのは、時に厳しい薫陶を授けることがあつたからだろう。また清年の三回忌には「南無阿弥陀仏」を頭字に詠んだ三首を残している⁶⁰。

『松屋筆記』には、自分の娘であつた毛與^{もよ}があまりにも清年に似ていることを記す印象的な話が残る。

毛與が容貌、次郎清年に相肖て、其音声挙動、但清年が再生せるかと疑はる。清年は文政七年甲申閏八月廿七日に年十八歳にて病死せり。毛與が母胎にやどれる時を推かぞふるに、同年十一月廿七日なるべし。閏八月廿七日より八十七日にあたれる夜、母懷妊し、翌年西九月は前年の閏八月の周回にて十箇月にて出生せる也。又清年は卯月正月の誕生にて酉を七ツ目とす。毛與兒は酉年の誕生にて、卯

をセツ目とす。余も又天明三年癸卯年三月十七日の出生也。かたゞよしありて、毛與女は必次郎清年が後身なることをしれり。^①

誕生月が与清、清年、毛與がそれぞれ干支順に七番目に該当することから、清年は毛與が清年の後身にあたるのだと述べている。引用に続く箇所では顧況普叔の故事を引いて「後身」を正当化しようとすらしている。清年の死がいかに惜しまれていたのかうかがえよう。他にも次のような記述がある。

文政十四年十一月、余次男幸次郎（後に為次郎清年と號す）と共に、武藏國足立郡大間木新田の八町會館にあり。^②

幼いころの清年と共にでかけた記録を書き留めている。年次には不審があり、文政十四年では清年が没して久しい。寛政の誤りかと思われるが、寛政は十三年で改元している。一応寛政末頃の思い出を記したものと考えるべき。

紀淑雄は村田たせ子が清年を養子にしたいと申し出ていたことを記しているが、確認できていない。^③ 事実であったとすれば、清年の能力の高さは与清一人のみならず、その周辺にどのような人々たちの間でも話題になっていたのかもしれない。

文政七年十二月、宗碩が大永二年（一五二二）に記した紀行文を清年が校合し、与清の説、考証等を書き加えた『佐野のわたり』が開板される。小山田与清・与叔連名の仮名序と松嶋饗庭盈の跋文をもち、刊記には江戸の須原屋茂兵衛、大坂の秋田屋太右衛門、京都の勝村治右衛門が書林として名を連ねている。

清年の自序によれば、校合は自身で行い、注釈と考証は与清の助力を得て記したという。なお、管見の範囲では異版はない。

『佐野のわたり』では、刊記の直前に「高田清年子校本目録」（以下「校本目録」）が付されている。これは清年が手がけてきた校本の一覧で、書籍と図絵をあわせて三〇点が掲出されている。ここに列挙される書物は、現存部分を確認するだけでも全て清年の手澤校合本であり、読者の手に渡ったことはまず考えられない。あくまでも清年を顕彰する意図で付されたものだろう。

「高田清年子校本目録」に掲出される書籍は彰考館文庫および早稲田大学に残されている。これらを突合することで、清年の業績が具体的に判明する。また一点を稿者が所蔵している。これは後に紹介したい。

表で示したように、清年校本と思しきものは彰考館文庫に五冊十点、早稲田大学に一冊三点が残る。戦災で焼失したであろうものも「国書総目録」の「旧彰考」の書名から推測できる。また、これらの書名は小山田与清が献納した蔵書のリストである早稲田大学蔵『松屋蔵書目録』（イ2-2309）にも類似した書名が確認できる場合もあった。しかし、ほぼ全て異なる書名で採録されているため、特定できなかった書物も少なくない。特に「和琴圖」「犬追物圖」などの絵図類は、行方がわからなかった。

なお「校本目録」には若干の採録漏れがある。他に清年が携わったことが確実なものとしては、彰考館文庫蔵書『御堂関白

「高田清年子校本目録」調査表

所蔵先・目録 書名	彰考館文庫本	早稲田大学図書館本	早稲田大学蔵 『松屋蔵書目録』
交替式	旧彰考		交替式模写本
多度寺縁起私財帳	旧彰考 (文化七写)		
忠盛集	旧彰考		忠盛集
鎌倉分限帳	旧彰考		
犬追物圖	旧彰考		
信明集	已6-0673		信明集
義孝集			義孝集
仲文集			仲文集
順集			順集
重之女集	已10-7097 (文政七年九月寫)		重之女集
匡衡集	已6-6978		匡衡集
隆季集			
長綱百首	已15-7361		長綱御百首
為家闕題百首	已15-7361		為家闕題百首
正党国師集	已10-7097		正党国師集
澤庵和尚集	已10-7097		沢庵和尚集
高臺院集	已6-6976		高台院集
揺樹抄	已6-6976		
遠嶋御百首		へ4 5068	
順徳院御百首			
土御門院御百首			
武藏見沼圖		ツ02 02506	
衣川軍歌			衣川軍歌
塚原卜伝百首			
色紙短冊傳			
神祇館図			神祇官図
元龜年中江戸圖			
をかたま圖			
和琴圖			
関東河渠圖			

*彰考館文庫本は国文学研究資料館マイクロフィルムにより、早稲田大学蔵本は実見により、それぞれ函架番号を付した。配列は私に変更した。旧彰考は『国書総目録』中の注記に従って付した。早稲田大学蔵『松屋蔵書目録』は松本智子「早稲田大学図書館蔵『松屋蔵書目録』翻刻」(『早稲田大学図書館紀要』五七、二〇一〇・三)に拠った。年号は奥書から清年書写年次がわかるケースである。已10-7097には他に「佛國禪師集」があり清年写とみられるが、「清年子校本目録」からは漏れている。

集 中園集」(已8—7028)がある。これは『御堂関白集』と『中國大政大臣集』の合写本で、与清の書き入れがある他、多数の異本校合がなされている。『御堂関白集』の奥書には、与清自筆で「文政二年令男清年書写之、以春雨軒宗也自筆本校合之。称古而用書青墨即宗也本也。松屋主人源与清」、「天保三年正月、以福知山侯造本再校也。所謂イ本者也。平小山田与清」とある。文政二年(一八一九)に清年が書写し、春雨軒宗也自筆本を青と墨の筆で校合し、さらに天保三年(一八三二)年に福地山侯の蔵本を「イ本」という異本注記で書き入れている。

清年校本の様相が判明する図書として早稲田大学蔵『遠嶋百首』(へ4—5048)も挙げておきたい。蔵書印と奥書から小山田与清旧蔵本であることは確実で、装丁こそ改裝されているものの、原裝表紙が扉として残されている。原裝表紙左肩題簽に「百首三部合冊」とあり、表紙直書で「遠嶋御百首後鳥羽院」「土御門院御百首」「順徳院御百首」とある。合冊状況からも「校本目録」中に、「遠嶋御百首」「順徳院御百首」「土御門院御百首」として掲出される清年校本とみて誤るまい。

作品ごとに字詰めは異なるもの、墨書の本文と、藍書の異本注記は全て同筆と考えて良い。朱書で合点、圈点および書き入れがある。朱書は与清の注記を右筆が転写したもの(清年か、間宮永好の手によるもの)だろう。藍書で加えられた異本注記の総数は二〇四点到¹⁴⁾及ぶ。和歌一首の欠落といった大きな違いだけではなく、漢字一字の読み違いなどにも注意を払っている。

これら藍書での校合作業全体を行ったのは清年なのだろう。異本校合それ自体は単純作業と言えようが、十代の少年が行う仕事としては緻密で丁寧であり、将来に期待をかけるに値するものと思う。彰考館文庫本においても、墨筆の本文に藍筆で異本校合を書き入れていたに違いない。このような左肩題簽の合冊書名と各書の直書書名をもつ清年校本として「信明集」「藤原義孝集」「藤原仲文集」「源順集」の合写本である『家集四部』(已6—6973)がある。

もう一点、『他阿上人歌集・四十八願和歌』(已9—7061)も清年の謄写本である。与清自筆で「遊行第二世他阿上人家集」及四十八願和歌以門人慧／充法師所校之本令男清年謄写之者也／文政五年六月 與清(花押)という奥書がある。門人の慧充法師の校本を清年に命じて書写させた本で「校本目録」には書名が挙げられていない。書写のみで校合作業を行っていないからだろう。

こうした校合のほかにも清年は模写に取り組んでいた。「校本目録」にみえる「をかたま図」は筆者が所蔵している。二葉の切でツレである。もともとは屏風に張り込まれていたのだろうと推察されるが、原態が本のように綴じられたものであったかはわからない。

一枚目には、おがたまの樹の色彩画があり、題に「乎加多万乃本真寫」とある。図の周囲に墨書で書き入れがあり、さらにそれを訂正するかのような、朱書の書き入れがある。本図の二

枚目には墨書で「右日向延岡城主牧野越中守殿より写上り候也／伊勢貞丈寫」とある。

墨書の書き入れは「信友按」とあるように、伴信友『比古婆衣』の抄出である。『比古婆衣』自体にも幾度も増補が加えられており、版本と写本でも本文が異なることが知られているが、清年が参考にしたのは版本ではないようだ。伴信友自筆本『比古婆衣』は線画に色指定を書き入れたものだが、本図は構図・色彩ともにほとんど一致しており、どちらも「日向延岡侯ヨリ公儀被注進云々」とある伊勢貞丈の模写本を底本にしている。本図は伊勢貞丈模写本を写したものと考えられるが、そうだとすれば『比古婆衣』と一致する記述が多すぎるように思われ、今は『比古婆衣』を元に色の指定通りに書き入れたものと考えておきたい。

注意したいのは次の墨書の下に書き加えられた朱書である。

（墨書） 信友按、一宵談に云、

（朱書） 与清曰閑田耕筆也。一宵談ト云書は無也。

与清が朱書で注記を加えている。朱訂正も与清が行ったものだろう。ただし『閑田耕筆』にはこの文章は見えない。異版や独自の本文に依ったのだろうか。⁽¹⁷⁾『比古婆衣』では同文が割書で確認できる。

近頃尾張人牧墨仙と云人の著せる一宵談といふ書に。

傍線部は本図にない部分である。続く本図の文では「薩摩方、鬼界島、屋久の島、^{トカラ}丁嶋の内に、をかたまの木といふものあ

り。其屋久島より得たるもの、津の国灘吉田氏秘藏す。花は紫、辦黄、藥實は橘柚の類となん。」とあって、わずかな字句の異同があるが、ほとんど『比古婆衣』と一致する。ただし、本図では信友按に、二説あれか是なるを知らず。一宵談に、花は是国に同さるにきこゆれと、実はこと也。おもふに此国の実をかたまといふ義にちかゝらむ坎。をかたまはわかすにて、みつしき玉に似たるよしなる。」までは墨書で記され、続く文章が朱書で記されている。墨書の本文にも数カ所朱で訂正がミセケチで記されており、朱書を加えた人物も清年と同じ資料を座右に置いていたのである。この点からも、朱書の筆者は与清と考えて差し支えない。

この図は刊本『松屋叢考』巻一の口絵にも墨線画で描かれ、「所^レ出^ニ於薩隅日之地^ニ乎加太万真圖以^ニ伊勢貞丈翁手澤本^ニ寫^レ之。高田清年」とあり、本図と同文で転写したものと思われる。二枚目には、清年没後に書き付けたと思しき与清自筆の奥書がある。

右櫺圖一葉。次郎清年所手寫也。清年文政七年閏八月廿七日。年十八而死。今觀其手澤。追念之情不已矣。廻採筆記事焉。

松屋主人源興清（花押）

清年没後に清年の「筆記」を「採」ったのは「校本目録」の為であろうか。清年の死がいかに与清の中で大きな出来事だったのかがうかがい知れよう。

清年は与清の蔵書管理において、書写、校合、そして模写と様々な補助を行っていた。与清は時に助言を与え、朱書で疑問を書き付けるなどの教育的配慮を含む蔵書管理や考証活動を行っていた。与清は清年にとってその学業の最大の成果が『佐野の渡り』の校合と注釈だと考えたのだろう。

三 与叔の活動と与清蔵書の行方

弘化二年から体調を崩した与清は、蔵書のほぼ全てを徳川斉昭に献納することを決める。この経緯について与清は早稲田大学蔵『松屋棟梁集』一一巻（へ2―4772―11）に次のように記している。

弘化三年の夏の初にはあつく成はへり。いと頼少なくおぼゆるだに、ひめもてる二万巻あまりの書巻ども、なき跡にてちりほひうせもこそすれと、いとほいなきを、常に御かへり見かうぶれる水戸の大城の殿様に、愁ひまうし、に許しきこえさせ給ひければ、よろこびにたへでこれに奉りてよめる。

今よりは残る書巻なつの日も心涼しき道に入らまし⁽¹⁸⁾
自身の「なき跡」に書物が「散り失せ」ては「本意なき」事であると述べており、自身の死後も蔵書をまとめておきたいという意思があったことをうかがわせる。だが、いずれの資料にも書物の継承について子息の話題がでてこないのは、そもそも与叔を後継にたてて擁書楼を継続する心づもりがなかったこと

を示している。

そうして彰考館文庫に残された小山田与清旧蔵書を眺めてみると、与叔が関わった事例も少なからず確認出来るのである。彰考館文庫蔵『他阿上人家集』（巳9―7060）には、与清自筆で次の奥書が残されている。

他阿上人歌集三卷。文政六年二月。令男与叔贍写之。此原本藤澤山所蔵。卅二世上人之自筆本也。我門人慧充法師。就彼山而所請集也。高田与清記⁽¹⁹⁾。

この『他阿上人歌集』は先にも見たように清年も書写している。門人であった慧充法師が集めてきたという内容も、清年贍写本の『他阿上人家集』と同様の事情を示している。また、与叔は大草六二郎所蔵であったという『慕京集異本』（巳5―6932）の書写も行っている。奥書の一つに文政八年七月五日に大草六次郎所蔵の古寫本を写したとあり、「源與叔」の署名が見える。清年同様に、与叔も与清に関わる書写活動を行っていたのである。『慕京集』が版本として刊行された際には、与清とともに序を記している。⁽²⁰⁾

また、清年と与叔が共同で事業に当たっていた形跡がある。『松屋外集』初編巻一一に収められる「赤斑瘡辨」には、次のような奥書が付されている。

赤斑瘡辨及考證五卷、家嚴所答於或人間之撰也。起筆於今茲正月十九日、成稿於二月三日至仲夏之比。再添削改作而命兄（与叔）與余讀之。於是旁就原本而校讐訂正云、文政

七年歳在甲申秋七月既望、男源清年謹識。

『赤斑瘡辨』が「或人の問」に答えたものであることから、『群書搜索目録』を使って種々な人々の疑問に答えた『松屋外集』に収載されたのであろう。与叔と清年はともに与清の問答に関わる著作の「再添削・改作」を命じられて校讐に当たり、与清による知識人たちへの疑問への回答、いわば「リファレンスサービス」に参与していたのである。

与叔が清年と共に与清の子息として、擁書楼の蔵書管理と形成に関わっていたことは間違いない。与叔が清年ほど多くの著作を書写校合したかどうかは、まとまった史料がないので不明であるが、既述のように早稲田大学蔵『遠島百首』のごとく、子息が書写校合を行った奥書を記さない場合も少なくないので、ここに挙げたものだけが与叔の成果とは限らない。与叔は、与清没後に小山田家に遺された蔵書の管理を行い、門弟達との各種調整に取り組んだと思われる。

門弟からも与清没後に遺された和学の学統を与叔が継いでいるとみられていた。問宮永好は『古学道統図』の小山田与清学統の冒頭に「小山田与叔」を掲げている。また、与叔は問宮永好『和歌年中行事』（嘉永七年刊）にも識語をよせ、鶴峯戊申『嘉永刪定神代文字』（嘉永十年刊）にも「小山田與叔俊平題」として題跋を寄せている。鶴峯もまた『古学道統図』において与清の門弟中最後に掲げられている人物で、与叔が与清の門弟たちと関わっていた形跡が認められる。

四 与叔による小山田文庫の蔵書管理

なぜ与叔が与清を継承する人物であると認められていたのだろうか。実子の長男であったこともあるだろうが、実務上、与清の擁書楼なき後に、与叔が与清の蔵書や門弟の管理を行っていたからではないかと考えられる。具体的に与叔による図書の管理について論じていきたい。

もと高田家に残され、後に早稲田大学に入った本の中に『和漢年契』（リ07-407）がある。『和漢年契』は寛政八年（一七九六）、三村其原の手によって作られた日中の元号・事象を比較通覧する歴史便覧であり、各地に多数現存する。早稲田大学にも三点が現存する。本書は表紙に「高田（二字不明）」、「小山田」、扉に「小山田文庫」、一丁表に「同攻會印」、末尾に「與叔」の印記を持つことから、彰考館に献納されずに、高田家に残った本であることが確実である。印記のひとつに「東京専門学校同攻會」があることから、学校の事務方でも使われた実用的な図書で、四七丁以降に朱書および墨書、鉛筆で増補がなされ、明治三〇年まで年次が書き込まれており、明治中期まで増補されながら利用されていた。

問題になるのは、末尾の「大日本年號改元素引」一丁の部分である。これは「大寶（文武五年／三月廿一日）」以降の元号が改元日と共に記される和暦の年号索引なのだが、本書では、この年号が「嘉永（弘化五年／二月廿八日）」まで存している。

これは墨書での追加ではなく、印刻で増補されており、本書の印刷時点ですでに「嘉永」の年号がはつきりと版木に彫られていたのだ。刊記には「天保二年辛卯十月／校正再鐫」とあり、天保以降、弘化、嘉永と改元されることに増補された後修本なのだろう。

小山田与清は弘化四年三月二五日に没している。すなわち、この本は与清の生存中には影も形も無く、この本に捺された蔵書印は一類たりとも捺すことができなかったものなのである。

このうち「小山田文庫」の印は、明治三八年から四一年にかけて早稲田大学の和漢書の印記を収集して作られた、市島謙吉『蔵書印譜』（正統四冊・チ10—0389）や、『半峯昔ばなし』に見られる高田早苗の言を根拠に小山田与清のものと考えられてきた。しかし、この説は上記の印を与清が捺印することができなかった以上、再考の必要がある。すなわち「小山田文庫」の印を捺したのは与叔である可能性が高い。

他に「小山田文庫」印の見える図書を掲げてみたい。早稲田大学の蔵書中、「小山田文庫」の印記をもつ図書は次の九点がある。

- ① 『門生名簿』（ヌ06—09232）
印記：與叔、小山田文庫
- ② 『墓相口傳』（ロ14—01444）
印記：小山田文庫
- ③ 田中本孝『添水塵芥』（ヘ01—04636）

印記：小山田文庫

- ④ 小山田与清『都の道の記』（ル03—03331）

印記：小山田文庫

- ⑤ 賀茂季鷹撰『伊勢物語傍註』（上下：ヘ12—04325）

印記：島岡文庫、小山田文庫、高田貢平

- ⑥ 楳取魚彦『古言梯』（ホ02—4921）

印記：松屋、小山田文庫、高田貢平、與叔

- ⑦ 高田与清『松屋棟梁集』（ヘ02—4772）

印記：小山田文庫、高田

- ⑧ 本居宣長『字音假字用格』（ホ02—4922）

印記：小山田文庫、松乃屋、高田貢平

これに先の『和漢年契』を加えた九本である。与清の印記である「松屋」「松乃屋」の捺印が捺されている本もある。ほか、「小山田文庫」の印がある図書は、東京大学附属図書館に次の三点が確認できる。

- ⑨ 行智『鈴掛衣』（C40—2224）

印記：小山田文庫、陽春盧記、南葵文庫

- ⑩ 平晴海『歌かたり』（四一—136）

印記：小山田文庫

- ⑪ 『令義解』（A00—6423）

印記：細川文庫、糸屋、小山田文庫、間宮文庫

さらに、もりおか歴史文化館に次の一点がある。

- ⑫ 『和名類聚抄』（和1459）

印記…小山田文庫、ときは園、與叔、松の屋
東京都立中央図書館には次の一点が確認できた。

⑬ 猿渡容盛編『松屋棟梁集』（特別買上本…1957）

印記…高田蔵書、小山田文庫、文学士高田早苗之印
同書は文雅堂を経由して購入された特別買上本の一冊である。
裏見返しに書肆書人にも高田早苗の旧蔵である由が記されている。⁽²³⁾

静嘉堂文庫図書館には次の一冊を見た。

⑭ 『拾芥抄』六冊（501—13—20101）

印記…聞書之記、小山田文庫、松屋蔵書、静嘉堂
現蔵、他二顆

静嘉堂文庫の松井簡治旧蔵書には小山田与清関係の図書が多数
含まれている。他にもあるかと思われるが、今後の課題とした
い。

このようにしてみると、「小山田文庫」印は「松屋」、「松屋
蔵書」「松乃屋」といった小山田与清の号を冠した蔵書印に並
行して付されているケースが見られ、また、与清の稿本にも付
されていて、小山田与清の旧蔵書に捺されていることが多い。
この傾向はおおむね「與叔」印とも共通する。⁽²⁴⁾ 小山田与清旧蔵
書・稿本をまとまって手にできた人物の印とみて誤らない。

実は、「小山田文庫」の蔵書印は、管見の範囲で彰考館文庫
本にある小山田与清旧蔵書中に確認できないのである。現在、
稿者は一八〇点ほど小山田与清旧蔵書を確認しているが、そこ

には「與叔」、「小山田文庫」の蔵書印が押印されている書籍は
ないのである。与清が生前に寄贈した大量の書物に、与叔の蔵
書印および「小山田文庫」の印が存しないということは、この
印記が与叔の蔵書印である可能性が高くなる。⁽²⁵⁾

これらの点を考えると、与清が擁書楼の図書の大半を寄贈し
たあと、高田家に残された書物は、一時期であれ与叔がそれを
管理していたと考えて差し支えないだろう。

「小山田文庫」の印記がある本のうち、問宮永好の所有に帰
したものがあつたことは、門弟の手に渡つて、高田家から出たも
のがあつたことを示唆している。⁽²⁶⁾ 山田洋嗣は盛岡藩主であつた
南部利郷および明子が問宮と深い関わりをもち、その関係で小
山田与清の著作などを手にしていたことを記している。

すなわち、もりおか歴史文化館蔵与清書入本『和名類聚抄』（前
掲）も、与叔から永好の手にわたり、問宮の没後に南部家に渡つ
たものとみて間違いない。与叔が与清門弟らへの寄序や、与清
没後にもわずかながら集書・整理を行っていたことは、与清門
の継承をそれほど強い意思のもとではなかったとしても、企図
していたことと見てよい。

与清没後の与叔について、早稲田大学蔵猿渡盛章賛『小山田
与清肖像』（ヌ06—9403）に記述がある。与清没後にそ
の業績を顕彰するために描かれた画賛である。

即実子與叔其後繼^子猶王府^尔仕^職、抑此大人倭学^尔勇雄^{志久}
俊傑絶^遺事^乃世人知所^尔、今亦言舉待受、故上貴人^{与利}

下四方^乃國人等^尔至^尔麻^尼芳^之名^慕其^門踏^平者^日踵^繼
其^著拾^遺書^波已^尔梓^彫世^播少^加其^寫本^尔遺^繼
百^余卷^其家^傳
多利

与叔は与清の迹を繼いで彰考館に仕えていたという。「此大人」已下は与清についての記述で、貴人から地方まで門人が多かったこと、その著作が開版上梓されたこと、与清著作の寫本が「家」（高田家）に伝わっていたことが記されている。猿渡が「家に伝た」る本についての情報を手に入れることができたのは、与叔が与清の旧藏書を管理していたからだろう。永好や盛章の記述が示すように、与叔は、門弟たちおよび彰考館と関わりをもち、藏書の管理を行っていた、与清の正統な後継者とみられていたのである。

五 おわりに

与清の二人の子息の足跡をたどってきた。清年は若年で没したものの、生前与清藏書の書写校合に精力的に関わり、模写や考証にも与清の指導を受けつつ精力的に取り組んでいた。与清は夭折した清年を追慕する詠を残し、その功績を称えて『佐野のわたり』を版行するにいたる。その「著述目録」を調査するさなか、「おがたま圖」を見て、何か書き付けずにはいられなかったであろうし、『遠嶋百首』は清年との思い出とともに手元に残して置きたかったのだらうと思う。

一方の与叔は、与清からみて不出来な子息であつたかもしれ

ない。著作もなく、自力で刊行した考証もない。身体も強くはなかつたようだ。しかし、与清の学統を繼ぐ者として間宮永好が認識していたことや、与清没後の藏書管理を行っていたことは注目に値する。

高田早苗は、与清以降にその学問を繼ぐ者もなく、「四書五經すら満足にない」状況下で、貸本屋で本を借りて読んでいたと述べている。しかし、高田家には与清の稿本等、小山田与清の遺品が多数残されており、それが早稲田大学に寄贈されるまで高田家に存していた。高田早苗の記述をすべて信用することはできない。本稿で述べた範囲でいえば、「小山田文庫」の印が与清のものであると高田早苗は述べているが、これは誤りである。高田家に残された多くの印に捺された「小山田文庫」の印記から、彰考館文庫の本にもそれがあることを確信していたのだろうが、実際に高田家に残された本の大半は与叔の管理下にあつたと考えて差し支えないと思われる。

しかし、与叔はもはや藏書二万巻を誇る擁書樓の主人ではなかつた。そこに集う文人達もなく、通船屋敷も度重なる火事によつて焼失、もとより与清の購書好学の影響で厳しい状況にあつた見沼通船も困窮することになった。与叔は数少ない藏書を維持管理するのが限界だっただろう。それだけに、与清を追慕する念も浅からぬものがあつたのかもしれない。与清から与叔へと受け継がれた図書は、その後に散逸したのも少なくなかったが、その多くは、高田早苗の父である高田貢平へと引き

継がれるのである。³⁰⁾

【付記】

『松屋筆記』は『松屋筆記』（国書刊行会、一九〇八）、『松屋叢話』は日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成 第二期 第二卷』（吉川弘文館、二〇〇七）、『松屋外集』は国会図書館蔵本に拠った。割書は（〜）で囲い、私に一部の表記を改め、句読点を付した。架蔵本図版は濃度の調整を行っている。早稲田大学、国会図書館の本文引用は利用規程に従った。各関係機関に御礼申し上げます。本稿はJSPS科研費J P 2 1 J 0 0 8 1、J P 2 2 K 3 0 4 0 の助成を受けた。

注

（1）安西勝『小山田与清の探究 一』（私家版、一九九〇）では「見沼通船発掘探索並当時風聞取調書」（『埼玉叢書 一』所収）を根拠に、六代目差配役鈴木源蔵（与叔）のあとに宗之介が見沼通船の業を引き継いだとある。もともと見沼通船は兄弟であった高田茂右衛門と鈴木文平の二人から始まり、高田・鈴木両家の連名御用で運営されていたが、五代目鈴木徳治郎の時に単独勤務がはじまった。この背景には高田と鈴木の家との争いがある、与叔は文政四年（一八二一）に鈴木徳治郎の元へ与清の命で養子に入ったが、同書によれば文政十三年（一八三二）には与叔は病床にあって宗之介に跡目を譲ったとある。小宮山風軒『風軒紀談』には文

政二年における高田家の状況を与清が語ったことが残されている。安西は、与清としては鈴木家を与叔に、高田家を清年に継がせる構想があったのだらうとしており、同『小山田与清の探究 三』（私家版、一九九六）では文政八年十二月（文政九年の可能性もある）に見沼通船方から退いていることから、この時にはもう清年に高田家の家督を継がせていたとする。ところが、清年の夭折によって一時的にせよ宗之介が鈴木・高田の両家の跡目になったことで、「高田」の屋号が揺らぐことになったらしい。与清が小山田姓を名乗るようになったのはこのような背景もあったかと安西は述べている。与清が蔵書を与叔に引き継がせなかった背景には、与叔の学才や健康上の問題だけではなく、このような見沼通船方を巡る高田家の状況も関係している可能性は留意すべきである。

（2）紀淑雄「小山田与清」（長田偶得編『徳川三百年史 下』裳華房、一九〇三）。

（3）安西勝『小山田与清の探究 四』（私家版、一九九七）によれば、丸満は多摩郡平山村の若宮八幡の神主大沢家の養子となっているが、与清の記録には出てこない人物なので、何かの事情で一時的に与清の息子としたものかとする。なお、「平山村若宮八幡宮神主跡相統議定書写」（府中市立郷土館編『府中市郷土資料 七』府中市教育委員会、一九八四（文書一七五号）所収）参照。

（4）与清は、『日本書記』の注釈に本孝説を用い、その校合にも「田中本孝版本」を用いている。

（5）『松屋叢話』巻一、「村田春海の詩」。

- (6) 『松屋筆記』 卷十四、「恩人」、「松屋外集」 卷三。田中康二『江戸派の研究』(汲古書院、二〇一〇) 参照。
- (7) 増田由貴「擁書楼における小山田与清の門生とその活動」(『奈良美術研究』 一六、二〇一五・三) 参照。
- (8) 与清の紀行文において、地方にいる門弟等に『萬葉集』などを口授したと記すのも、こうした学統意識が背景にあるのであろう。
- (9) 早稲田大学蔵『松屋棟梁集』 七(ヘ2—4772—7)。東京都立図書館蔵『松屋棟梁集』(特1954) にも異同があるものの同一詠がある。安西前掲書にも指摘がある。
- (10) 『松屋棟梁集』 八(ヘ2—4772—8)、東京都立図書館蔵『松屋棟梁集』にも存する。
- (11) 『松屋筆記』 卷六十五、「少女毛臈」。
- (12) 『松屋筆記』 卷五十、「墜石」。
- (13) 紀淑雄注2前掲書。
- (14) これらの異本注記の書式は一定ではなく「イ」と付すものや一字のみ訂正するもの、墨書本文に欠落していた一首を詞書と補うものなど様々であり、数え方によっては異同数に増減があるだろう。
- (15) 稿者はマイクロフィルムで確認したので墨色までは判然としない。ただ、書き入れが本文より明らかに薄い場合、朱書ないし藍書の書き入れを想定することは不自然ではないだろう。
- (16) 川瀬一馬、大鹿久義編『伴信友全集別巻 研究編』(ぺりかん社、一九七九) 参照。
- (17) 国書刊行会編『伴信友全集 第五卷』(国書刊行会、一九〇九) 所収。
- (18) 早稲田大学蔵『松屋棟梁集』(ヘ2—4772)。松本智子前掲論文の翻刻に従う。
- (19) 山本勇夫編『高僧名著全集 第一八卷』(平凡社、一九三二)。
- (20) 無刊記本。与清の門人であった橋本好秋の刊行にかかる。文政五年十一月の好秋跋があるのでこれ以降の刊行であることは確実である。
- (21) 拙稿「小山田与清旧蔵書のゆくえ 附〈翻刻〉早稲田大学図書館蔵『明治四拾年六月調 高田氏寄託図書目録』」(『緑岡詞林』 四六、二〇二二・三) 参照。
- (22) 東京大学では総合図書館以外に国文学研究室、国語研究室等各所に分蔵されている。本来は正確を期すべきであるが、行論の都合上、一括で「東京大学付属図書館」とした。
- (23) 注1安西前掲書参照。佐佐木信綱編『近世名家家集 下巻』(東京博文館、一八九九) に抄録あり。猿渡盛章の跋文によると弘化四年の与清没後に与叔と与常から反故早稲田大学蔵『松屋棟梁集』のことか)を借り受けて編纂したとある。本書の印記もまた「小山田文庫」印が与清旧蔵書ではないことを示す本である。
- (24) 小山田文庫の印がなく「與叔」のみ印記がある図書も存する。静嘉堂文庫蔵『松のおち葉』十二冊等がそれで、内題下に「與叔」の印がある。本文は右筆によって書かれたものと思いが、与清自筆の書入れが多数存している。「與叔」の印は与清の原稿や書入

本に付されることが多いが、與叔印のみの本もある。また、現物は確認できてないが東京大学附属図書館蔵本居文庫『風葉和歌集』（本居391・1448・技773）にも印記に「與叔」とあるとOPAC上の一一般注記にある（アクセス日時2023年2月19日）。国文学研究資料館のマイクロフィルムや紙焼写真では「與叔」印は確認できなかった。

(25) 国文学研究資料館のマイクロフィルムによる。

(26) なお、与叔の蔵書印とおぼしき「與叔」印には二種類がある。単朱長陽印と、陽刻「與」「叔」の一字印が二顆捺されているような印の二つだが、基本は長方単辺の印で、使い分けはよくわからない。また「小山田文庫」の印記には墨と朱の二色があるが、これらに使い分ける意識があったかどうかとも判断を保留しておきたい。

(27) 紀叔雄注2前掲書によると、小山田与清旧蔵書は与清没後にしばしば神田の通船屋敷が火災に見舞われたことで散逸したり焼失したりしたものがあつたとする。門弟への贈与については記されていない。

(28) 山田洋嗣「間宮永好、八十子と南部利剛、明子と——挿話として——」（『福岡大学人文論叢』四一—二〇〇九・九）参照。間宮永好から南部藩主利剛に蔵書が移動した可能性を指摘し、さらにそれを妻の明子が書写していたことが明らかにされている。管見の範囲ではさらに藩として、与清や永好の注を移した本が制作されていたようである。

(29) 高田早苗『平峯昔ばなし』（早稲田大学出版部、一九二七）。そもそも高田早苗は与清の学業に不案内で、擁書楼の蔵書も「十萬」と述べるなどあて推量で話した箇所もある。高田家の末裔であり、明治期の高田家の状態を知る上では一次史料として差し支えないだろうが、その発言を全面的に信じることは危い。

(30) 拙稿注21論文参照。ただし、高田貢平はそれほど高田与清の顕彰に熱心ではなかったようである。

（うめだ・けい／本学非常勤務講師）

